

令和6年度 伊賀市立中瀬小学校いじめ防止基本方針

Ⅰ いじめ防止に関する基本的な考え方

(いじめの定義)

「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

- ① いじめには多様な態様があることから、法の対象となるいじめに該当するかどうかを判断するに当たり、「心身の苦痛を感じているもの」との要件が限定して解釈されることのないようにする。例えば、いじめられていても本人がそれを否定する場合が多々あることから、いじめを受けた児童本人や周辺の状況等を客観的に確認したり、当該児童の表情や様子をきめ細かく観察したりするなどして確認する。
- ② 「物理的な影響」とは、身体的な影響のほか、金品をたかられたり、隠されたり、嫌なことを無理矢理させられたりすることなどを意味する。「けんかやふざけ合い」であっても、見えない所で被害が発生している場合があるため、背景にある事情の調査を行い、生徒の感じる被害性に着目し、いじめに該当するか否かを判断する。
- ③ いじめを受けた児童の立場に立って、いじめに当たると判断した場合にも、その全てが厳しい指導を要する場合であるとは限らない。例えば、好意から行った行為が意図せずに相手側の児童に心身の苦痛を感じさせてしまったような場合や、言葉で相手を傷つけたが、すぐに児童が謝罪し教職員の指導によらずして良好な関係を再び築くことができた場合等においては、「いじめ」という言葉を使わずに指導するなど柔軟に対応する。ただし、これらの場合であっても、法が定義するいじめに該当するため、事案を学校いじめ対策組織へ情報共有する。

(いじめ防止等に関する基本理念・学校としてのいじめ問題についての考え方 等)

「いじめは、いじめを受けた児童の教育を受ける権利を著しく侵害し、その心身の健全な成長及び人格の形成に重大な影響を与えるのみならず、その生命又は身体に重大な危険を生じさせるおそれがある。」また、「いじめは、どの学校、どの学級でも起こりうるものであり、どの児童も被害者にも加害者にもなりうる。」という基本認識を本校全教職員が持ち、児童の尊厳が守られ、児童をいじめに向かわせないための未然防止や早期発見等のための対策を行う。

(いじめが「解消している」と判断するための要件)

① いじめにかかる行為が止んでいること

被害者に対する心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）が止んでいる状態が相当の期間継続していること。この相当の期間とは、少なくとも3カ月を目安とし、さらに長期の期間が必要であると判断される場合は、学校の設置者又は学校いじめ対策組織の判断により、より長期の期間を設定するものとする。

② 被害児童が心身の苦痛を感じていないこと

被害児童本人及びその保護者に対し、心身の苦痛を感じていないかどうかを面談等により確認する。学校は、いじめ解消にいたっていない段階では、被害児童を徹底的に守り通し、その安全・安心を確保する責任を有する。

いじめが「解消している」状態に至った場合でも、いじめが再発する可能性が十分にあり得ることを踏まえ、学校の教職員は、当該いじめ被害児童及び加害児童については、日常的に注意深く観察する必要がある。

2 学校におけるいじめ防止等方策のための組織

伊賀市立中瀬小学校いじめ防止対策委員会

いじめ防止等の措置を実効的に機能できるよう、管理職、生徒指導担当、特別支援教育コーディネーター、養護教諭、必要に応じて、いじめ問題相談員、県・市から派遣されるスクールカウンセラーによる「いじめ防止対策委員会」を設置する。

〈開催時期〉 学期1回（必要に応じて、適宜開催）

〈機能〉 いじめ問題に関わる年間計画の作成

いじめ問題に関わる取組の検証

いじめ事案に対する対策の検討

3 学校におけるいじめ防止等の方策のための具体的な取組

(1) いじめの防止

ア 学校経営方針、マニフェストに位置づける。

人権・同和教育を推進し、生命および人権尊重の精神に徹した教育を推進し、いじめをゆるさない学校づくりに努める。

イ 人権・同和教育の充実とともになかまづくりを進める。

児童の生活実態やその背景を的確に把握し、課題を明らかにして、学校教育の全領域で人権・同和教育を推進する。

生活の中の不合理や矛盾に気づき、差別を許さず差別に立ち向かう、豊かな感性とたくましい実践力をもった子を育成する。

障がいのある人や外国にルーツをもつ人に対する正しい理解と認識を深め、ともに高まり合う集団づくりに努める。

自分を見つめ、仲間とのつながりを深めさせ、自尊感情を育む。(なかせっこの充実等)

ウ 社会性やコミュニケーション能力を育てる。

地域のいろんな人をゲストティーチャーとして招き、人と人とのつながりの大切さや人権の大切さを学ぶ。

社会性やコミュニケーション能力、読解力、思考力、判断力、表現力等を育むため、読書活動や対話・創作・表現活動等を取り入れた教育活動の充実を図る。

エ 自尊感情・自己肯定感を育てる。

互いの良さに気づく取組を行い、自尊感情を高める。

オ 児童会の取組をすすめる。

教育活動全体を通して、児童の自主的な活動を推進し、いじめにつながるようなトラブルなどに対しても、教職員の適切な指導の下に、児童生徒自らがすすんで解決しようとする力の育成を図る。(児童集会等)

カ いじめ問題に関する教職員の資質向上

いじめ防止等のための対策に関する本校における教職員の資質能力の向上に必要な研修を実施する。

キ 保護者、地域、いじめ問題相談員、関係機関との連携を図る。

子どもの変化を見逃さず、保護者と日常的に連携を図る。

児童アンケートやQU調査をもとに学期ごとに子どもの実態について協議する場を持つ。等

(2) いじめの早期発見

ア いじめについてのアンケート調査の実施

① 児童対象 年3回(5月、9月、1月)

② 保護者対象 年1回(12月)

* 調査当日に何らかの理由により欠席した児童生徒については後日、調査を実施する。

* 長期欠席者等については、家庭訪問などにより、きめ細かな状況の把握に努めるなど、十分配慮して実施する。(アンケートの実施が困難な場合については、個別の聞き取り調査により状況の把握に努めるなど児童生徒の状況を十分に考慮して実施する。)

* アンケートの保存期間は、実施年度の末から3年間とする。

イ 教育相談の実施

・児童及び保護者がいじめに関わる相談を行うことができるよう次のとおり相談体制の整備を行う。

① 担任等による日常的な教育相談

② スクールカウンセラーの活用

③ いじめ問題相談員の活用

④ ふれあい教室・市青少年センター等、相談窓口の活用

ウ 日常的な取組(日記や作文、家庭訪問)

・子どもたちの日常生活で気になったことなどを互いに伝えながら家庭との連携を図る。

エ 教職員の情報共有体制

・職員会議や校内研修で「気になる子ども」の現状や指導についての情報交換や共通認識を図る。

オ インターネット等を介して行われるいじめの対策

・インターネット等を通じて行われるいじめの防止、また、児童及び保護者が対処できるように、外部講師を招聘する等、情報モラルに係る研修会を実施する。

(3) いじめに対する措置

ア いじめ問題にかかわる児童の安全確保

いじめを発見・通報・相談を受けた場合には、特定の教職員で抱え込まず、速やかに組織的に対応する。被害児童を守り通すとともに、教育的配慮の下、毅然とした態度で加害児童を指導する。また、いじめを知らせてきた児童の安全も確保する。状況によっては、スクールカウンセラー等を児童にあてる。

イ 教職員の情報共有体制（職員会議、校内研修）、組織対応体制の確立

いじめの発見・通報・相談のあった場合、中瀬小学校いじめ防止対策委員会において情報を共有する。その後、速やかに関係児童から事情を聴き取るなどをして、いじめの有無の確認を行う。さらに、いじめの根本的な解決に向けた方策を構築し、取り組む体制をつくる。

ウ 保護者への連絡と支援・助言

いじめが確認された場合は、保護者に事実関係を伝え、いじめの受けた児童とその保護者に対する支援や、いじめを行った児童の保護者に対する助言を行う。また、いじめ事案に関する事実関係その他の必要な情報を適切に提供する。

エ 関係機関・専門機関と連携

いじめを確認した状況について、校長が伊賀市教育委員会に報告する。いじめ事案の状況により、関係機関・専門機関との連携を図る。

4 重大事態への対処

(1) 重大事態に対する調査

いじめにより、児童の生命・心身または財産に重大な被害が生じた疑いや相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑いがあると認めるとき、緊急のいじめ防止対策委員会を開くとともに教育委員会の指導・助言の下、事実関係を明確にするための調査を実施する。（児童や保護者からいじめにより重大事態に至ったという申し出があった場合も含む）

また、法に抵触すると考えられる場合は、伊賀警察署に通報し、対応等の相談を行う。

(2) 調査結果の提供及び報告

調査結果については、教育委員会に報告するとともに、いじめを受けた児童及びその保護者に対し、事実関係その他の必要な情報を適切に提供する。